2023年12月24日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

クリスマスの祈り

［ヨハネによる福音書3章16節～21節］

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

[1]　クリスマスとサンタクロース

今日、このようにしてクリスマスの礼拝を行うことが出来ますことを嬉しく思います。私は、一年の終わりのようなこの時にクリスマスを迎えるというのは、ちょっとせわしないような気もするのですが、けれどもこの時期に迎えられるのもまた恵みではないかな、と思うのです。

さて、一般的にクリスマスと言うと「サンタクロース」がなくてはならない存在になっていますね。私自身もやはり幼い頃、サンタクロースが夜中にやってきて、枕元にプレゼントを置いて行ってくれたという体験をしましたね。妹と一緒にワクワクしていたように思います。一体いつからサンタクロースという人が全ての子どもたちに、その子に相応しいと思う贈り物を用意して、しかもその子が眠っている間、つまりその子が意識もなく、何もお返しも出来ない間に、名も告げずにそっと贈り物を置いていくという、世界最大の一大ストーリーになっていったのかは私は知りません。けれども、私は何かここには素晴らしいものが隠されているように思うんです。このようにサンタが世界に広がって行ったのは、特に「子どもたちへの祈り」というものが根底にあるのではないでしょうか？サンタクロースという人は凄い人だと思うんです。“ただあげる人”なんです。ひたすら贈る。それだけ。しかも礼は要らぬと言わんばかりに、子どもが寝ている間にそのミッションをやり遂げます。狭い煙突も厭いません。時にはすすだらけ、命がけで贈り物を届ける。本当にサンタというのは、子どもが大好きなんでしょうね。そこには贈り主の「この子が幸いな人生を送ることが出来ますように」という「祈り」があるからなのだと思います。そこには打算はないですよね。「代わりにお返ししてね」なんて全くないし、「これあげるからもっといい子にならないとだめだよ」なんて説教じみたことはありません。与えるだけで自分の役割は完結。それがいいなと思いますし、考えてみたら「祈り」というものは、そういうもの。ただ相手のためにあるのであって、それが尊いことなのだと思います。

先ほど読んで頂いた聖書の言葉もまた、ただひたすら人間に与えるための神様の愛というものをストレートな直球で書いてある、そういう言葉だと思いました。―「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3:16）。

[2] 神は、その独り子をお与えになった

　大人は、と言いますか、私たちは成長してくると、「ただ与える」とか「ただもらう」とかそのような世界がちょっと居心地が悪くなってきてしまうのではないでしょうかね。欲しいものがあれば頑張ってお金を貯めて買います。もし何か高価なもの・素敵なものをただでくれるという人がいたら、下心があるのではとか、あとから困ったことになってしまうのではないかと落ち着かないでしょう。良くも悪くも、私たちは「打算」「ギブアンドテイク」の世界の中にどっぷり漬かっています。それで私たちはむしろ帳尻が合うと安心もするのです。

ところが、聖書が私たちに告げてくれている世界は、サンタクロースとある意味同じです。与えたくて与えたくて仕方がないんです。何故なら神様は愛の内に人間を造り、人間が大好きだからです。その愛は条件はありません。地位もお金ももちろん条件にならない。自分が独身なのか家族持ちなのか、外国人か日本人か、また例えば前科のあるなしも関係ありません。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。 「世を愛された」の「世」というのは「人間」ということです。また人間も含めたこの世界のすべてです。それが滅んで欲しくはない。「滅ぶ」というのは、激しい言葉ですけれども、イメージとしては泥沼から抜け出せなくなってしまう状態といったらよいでしょうか、知らない内にその中に飲み込まれてしまっている。それは、「与える」ということの反対、「自分さえよければよい」という貪欲にとらわれてしまう人間の弱さ、愚かさのためです。それで神様が人間に愛想をつかしていたら、この世界はもう終わってしまっていたかもしれないと思います。しかし神様はそんな罪多き私たち人間を愛して、ご自分の独り子イエス・キリストを、二千年前に幼子としてあのベツレヘムの飼い葉桶の中に与え、送られたのです。そこには、神様の側の祈りがあったと思うんですね。人間は、これからも幸せであってほしい！お互いに裁き合うことも止めて平和であった欲しい！そして、人間がいつも依り頼むことが出来る同伴者としてご自分の愛する独り子、主イエスを送って下さった、それがクリスマスの出来事です。3章17節にはこう記されています。「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」

[3] 主イエス自身の、私たちへの祈りがある

クリスマスの夜の出来事のことは、特にルカによる福音書に詳しく記されています。クリスマスの最初の知らせは、神の御子の誕生であるにも関わらず、この世の王や宗教学者に伝えられたのではなく、当時の社会の中では貧しく、また律法で定められた安息日も守ることも出来ず、夜を徹しての仕事をしなくてはならない羊飼いたちにまず知らされました。夜空の天の一角が開けて、そこから声が聞こえてきたのです。ルカ福音書2章8節から読んでみます。―「その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町であなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」」（ルカ2:8～12）。

天使たちの第一声は、「恐れるな」でした。救い主イエスの誕生は、人間に「恐れなくてよいのだ」という告知と一つなんだと思いました。これはただいきなり周りが照らされたので驚いたということもですが、もっと深いことだと思うのです。私たちは、生きて行く中で、自分でも気がつかない色々な「恐れ」に取り囲まれているとも言えるのではないでしょうか。孤独であるとか、何か自分が取り残されたような思い、空に渡り鳥の群れが飛んでいたとして、自分だけはそこからはぐれてしまうではないかといった不安、また健康上の心配や「死」への恐れもあるかも知れないし、自分なんかいない方が良い、自分を抹殺したくなるような思い…、そういったことは大なり小なり、誰もが皆心のどこかにあるのではないかと私は思うのです。ひと昔前はそういうのは「暗い」と片付けられたこともありましたけれども、今はそのような不安な心への理解も深まってきたのはとても良いことだと思います。人間は誰も「闇」の部分を持っています。そして、天使がイエス誕生の知らせを告げたのは「夜」の出来事でした。その闇の中に、神の独り子は「飼い葉桶」の中に産まれて下さった、と天使は告げました。「飼い葉桶」というのは、実に、私たちの心そのものではないかと思います。そこを目掛けて主イエスは来て下さったのです。これは決しておとぎ話ではありません。神様の全力の愛の話です。

この主イエスはこの後30年ほど経って、最後、私たちの罪故に十字架にかかられるのですけれども、その前の日に、既にイエス様がご自分の死の予告のことも知らされて不安で一杯になっている弟子たちに、遺言のように話をされたのです（ヨハネ14章～16章）が、その締めくくりの言葉はこの言葉です。ヨハネによる福音書16章33節です。「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

クリスマスの時の「恐れるな」と、十字架を目前にした時の「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい」は、どちらも命令形の励ましの言葉でありますが、どちらも、主ご自身がそのように私たちのために祈って下さっているゆえの言葉ではないか、そう思えてなりません。「祈り」というのは、私たちが神に向かうことだと普通考えますが、逆なんです。まず、神様が人間の幸いを心から祈っている！イエス・キリストはサンタクロース以上の方です。当たり前ですけれども。先ほどサンタも命がけで子供たちの所にやってくると言いましたが、でもサンタクロースは死なないですよ。サンタの死というのは、未来永劫無いでしょう。けれども、主イエスは本当に命を献げて下さいました。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ15:13）と仰って、私たちの真の「友」になって下さったのです！「恐れないで」というその理由は、「あなたはひとりではない」からです。私たちの悲しみや苦難も含めて全てを本当に知り、愛し、受け入れて下さるために主は来て下さいました。このクリスマスの日は、主イエスの誕生の日であり、また、私たち一人ひとりの新しい誕生日です。クリスマス、おめでとうございます！お祈り致します。

神様、今日、このクリスマス礼拝をご一緒に捧げることが出来て感謝致します。飼い葉桶の中の幼子、ここには、私たちへのあなたの愛と祈りが凝縮されています。私たちの神となるために来て下さった主イエスよ、どうか、あなたは既に私たちの心の飼い葉桶の中に生まれて下さったことを信じさせて下さい。そして、あなたの愛の中で、互いに受け入れ合い、愛し合って行くお互いとさせて下さい。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。